

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：24602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12404

研究課題名（和文）奈良のシカを中心とした野生生物の観光資源化に関する研究

研究課題名（英文）Research on turning wildlife into tourism resources, mainly deer in Nara

研究代表者

水谷 知生（MIZUTANI, Tomoo）

奈良県立大学・地域創造学部・教授

研究者番号：40781555

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、野生動物と人との近接関係の観光資源化について、その経過、成立要因を奈良、宮島、金華山の事例により明らかにした。奈良では、神鹿の位置づけから近世以降シカと人が共存する形が作られ、それをベースに餌やりなどの観光利用が管理主体によって進められた。宮島では、明治以降、観光対象とする機会があったが、被害管理と観光利用を進める主体が成立せず、人の居住空間でのシカの観光利用は困難となった。金華山では、第二次大戦前後に、森林被害防止を目的としたシカの大量捕獲に直面し、神社が管理に取り組むが、観光資源として継続的な管理を行う体制となっていない。観光資源化の背景には共存の強い意志が必要であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

野生動物と人との近接関係の観光資源化は容易ではない。奈良では、近世以降シカと人が共存する形が作られ、それをベースに観光利用が管理主体によって進められたが、宮島、金華山では、観光資源として継続的な管理を行う体制が成立していない。その背景には、シカとの共存を図る地域の強固な意志の有無があった。本研究では近世以降にシカと人との近接関係があった奈良、宮島、金華山の3地域について、同時代の資料で近世以降現代までのシカと人との関係の実態を明らかにし、わが国の野生動物と人との関係史に新たな視点を提供するとともに、野生動物と人との近接関係を観光資源化する上での課題を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, we clarified the process and factors behind the establishment as a tourism resource of the close relationship between wild animals and people, using examples from Nara, Miyajima, and Kinkasan. In Nara, deer and people have coexisted since early modern times due to their status as sacred deer, and management organizations have promoted tourism uses such as feeding deer based on this coexisting relationship. Since the Meiji era, Miyajima has had opportunities to actively use deer as a tourism resource, but no entity has been established to promote damage management and tourism use, and it has become difficult to use deer for tourism in human habitation spaces. Before and after World War II, Kinkasan has faced mass hunting of deer to prevent forest damage, and although the shrine have tried to manage it, there is no system in place to continuously manage it as a tourism resource. A strong will for coexistence was necessary behind the development of tourism resources.

研究分野：地理学

キーワード：奈良のシカ 野生生物観光 宮島 金華山

1. 研究開始当初の背景

近年、シカの個体数の増加とともに農林業や生態系への被害が着目され、人とシカの共存は容易ではないとの認識が浸透している。一方で奈良のシカは、人との近接関係(餌やり)が外国人を含め来訪者の興味対象となっており、観光資源として共存にある程度成功している。これまで、野生動物との近接関係が興味対象となっていた観光地も多くあったが、サルへの餌やりは禁止される例が増え、人馴れしたシカがみられる宮島でも餌やりが禁止されるなど、野生動物との近接関係の観光資源化は容易ではない。来訪者にとって野生動物は観光対象であるが、その増加は住民にとって生活被害などをもたらし、その調整が容易でない点が背景にある。しかし、奈良では野生動物であるシカとの近接関係が観光資源として一応の定着をみせる。

奈良でのシカと人との近接関係(餌やり)は1800年頃には確認される(平・水谷2018)。奈良の人は、中世以降長期にわたりシカと特異な緊張関係を持ってきた経過から、観光対象としての受け入れは容易であったとは考えにくい中、どの時期から観光資源として定着したのだろうか。観光資源化をめぐって奈良の人とシカとの関係が近世後期以降どのように変化してきたか、また、奈良以外の地域でのシカと人との近接関係は観光資源となっているのかを明らかにすることにより、野生動物の観光資源化の背景・要因を整理することが可能となる。

2. 研究の目的

奈良の人とシカの関係の歴史は古く、中世の奈良では聖獣性、神聖性が強調されていたが、近世に入り、シカによる食害を受けた農家への租税免除等が行われた点などから、奈良の人の生活が配慮されるようになり、また、町を囲う鹿垣と市中の辻々の木戸によりシカの行動を制御・管理するようになった点やシカの角伐りを始めた点から、奈良のシカの扱いが「保護から管理へ」、「春日神鹿」から「奈良のシカ」へと変化したとされる。奈良の人にとってシカは、神聖な存在でありつつも、生活の場を共有し軋轢を生じさせるものとして関係の調整が行われてきた。一方で、17世紀中ごろから大量の参詣客を迎え、奈良のシカと来訪者との関係が生じ、17世紀後半からは来訪者の危険防止を目的に角伐りが行われ始める。「餌やり」という来訪者と奈良のシカの近接関係は1800年頃から見られ、観光対象化の端緒と考えられる。奈良の人にとって、神聖性を有する対象への餌やり行為の是非、餌やりによってシカと人が近接することによる日常生活への影響という面から、観光対象化は、容易には受け入れがたい面を持っていたと考えられる。

現在、奈良のシカは観光客の興味を集めるが、近接関係(餌やり)を観光資源として正面からとりあげるガイドブック類は多くない。奈良の人は近世以降、観光対象となっていく奈良のシカをどう捉えてきたのか、その視点は近世後期以降どのように変化してきたのか。本研究では、奈良のシカと人の長い歴史の中では、新しい関係性である観光対象としての位置付けが定着してきた経過を明らかにし、観光資源化に至った背景・要因を整理する。また、近世以降、シカと人の近接関係が確認される宮島、金華山でのシカと人との関係性の成立経過、人と観光対象としてシカの関係性とその変化を明らかにし、奈良と比較する。このことによりシカとの近接関係が観光資源として成立する背景・要因について検討し、野生動物と人との近接関係を考える上で新たな視点を提供し、今後の方向性に示唆を与えるものとする。

3. 研究の方法

本研究では、(1)来訪者の視点から近世以降の奈良のシカの観光対象化の過程の解明、(2)奈良の人の視点から奈良のシカの観光対象化の過程の解明、(3)宮島・金華山におけるシカと人の関係性の経過の解明、を同時代の文献資料の収集、関係者へのヒアリング等により行った。

(1)来訪者の視点から近世以降の奈良のシカの観光対象化の過程の解明

近世以降の来訪者が奈良のシカをどのように捉え、観光対象として成立していったか、その経過を同時代の資料で明らかにした。近世以降、来訪者が書き残した道中日記には、知り得た情報や感想が端的に記され、シカと人の関係性を明らかにする同時代資料として有用であることから、これまで収集していなかった明治期以降の道中日記の資料収集を行った。また、近世以降の来訪者の紀行文から、奈良のシカに関する記述を抽出し同様の解析を行った。特に明治期の外国人旅行者による紀行文が数多く記されており、来訪者の見たシカと人との関係の分析に有効であった。

(2)奈良の人の視点から奈良のシカの観光対象化の過程の解明

近世以降、来訪者がシカを観光対象とみなしていく一方、奈良の人がシカを積極的に観光対象として捉えていたのかについて検討した。近世の奈良に関する案内記や絵図でのシカの記載とその変化、近代以降のガイドブックでの奈良のシカの記述とその変化を抽出し、奈良の人がシカの存在をどのように紹介していたのか、人との近接関係を観光対象として紹介していたのか、いなかったのか、いつから紹介していたのか、その変化を明らかにした。

(3)宮島・金華山におけるシカと人との関係性の経過の解明

近世以降、広島県・宮島、宮城県・金華山は、シカと人との近接関係がみられる地として知られていた。これらの地域でのシカと人の近接関係が成立した経過を、文献資料、関係者ヒアリン

グにより明らかにした。近世については紀行文を主な調査対象とし、明治以降は紀行文や旅行案内書を調査対象とした。シカと人との近接関係の現状については、国立公園管理者、自治体等へのヒアリングにより確認し、観光対象化の課題について整理した。

(1)～(3)を通じ、奈良のシカが来訪者との近接関係を持ち、観光対象化する経過を明らかにし、そのことが奈良のシカと人の関係性にどのような影響を及ぼし、観光資源化されるに至ったのかを明らかにした。また、シカと人との近接関係が生じている他の地域での事例を検討し、シカと人との近接関係の成立経過、観光対象としての課題、シカの管理者と管理状況等を比較することにより、人と野生動物との近接関係が観光資源として成立する背景・要因を整理した。

4. 研究成果

(1) 近世以降の旅行者と奈良のシカの関係

奈良では江戸期に、住民とシカとの接触機会が増加したことから、鹿垣が奈良の町を囲むように設置されるなど、シカの行動を統制しようとした。シカの角伐行事も町内を出歩くシカから人々を守るために江戸期に始められ、江戸期にはシカを傷つけず、またシカによって傷つけられないための数々の工夫が凝らされ、住民とシカの「つかず離れず」の関係性が成立していた。

明治期になると、シカの保護や管理を担っていた興福寺が神仏分離によって解体され、シカは農産物を荒らす害獣として駆除対象となり、1873(明治6)年には春日大社参道に鹿園が2ヶ所建設されシカは収容され、1873(明治6)年時点で38頭にまで激減したとされる。その後シカが解放され、1878(明治11)年に神鹿殺傷禁止区域が設定されたことで頭数の回復が図られ、1891(明治24)年には奈良市内有志により「春日神鹿保護会」が結成され、翌年には夜間のみシカを収容する試みがなされた。明治期になると駆除、収容などがシカを積極的に管理し、住民とシカの関係は「つかず離れず」の関係にあった江戸期とは異なるものとなっていった。

旅行者とシカの関係は、江戸後期には旅人に対して餌を求めて近寄ってくるシカの様子や、子どもが旅人に向けて餌を売っている様子などが確認された。当時与えられていた餌は、鹿せんべいのみが販売されている現在とは異なり、せんべい、野菜、果物、おからの団子など多様であった。旅行者とシカの関係性は、シカの積極的管理が始まった明治期において変化しなかったかについて、明治期の道中記、紀行文、旅行記の記述内容を分析した。

旅行者による道中日記は明治期にも記されており、1873(明治6)年から1903(明治36)年までの間に奈良を訪れた記録のある道中日記32点を確認し、その中で、せんべいを買った記述が3件、餌売りが押売りをしたとの記述が1件見られるが、シカと旅行者の接触関係の実態を明らかにする資料としては内容が十分でなかった。

日本人によって執筆され、明治期に出版された書籍での紀行文で、奈良のシカについて記述しているものは、明治後期のものに偏っている上にその数はわずかであった。1897(明治30)年には「卯の花団子」を売るという一節、1899(明治32)年に春日神社境内で店で食を求め投げ与えたとの記述が確認できる。しかし、明治初期、中期のものは確認されず、明治期全体における旅行者とシカの関係を探るには十分ではない。

一方で、明治期に入り新たな旅行者層として、海外から「グローブトロッター」が来日するようになった。この外国人旅行者による1868(明治元)年から1911(明治44)年までの旅行記52点を分析した。このうちシカについてふれているものは47件で、奈良を訪れた約9割の外国人が、シカに関する記述を残していた。

この分析から、明治期においても奈良のシカに対する旅行者の餌やりが継続していたことが明らかとなった。シカが鹿園に収容されていた時期に訪れた旅行者も柵の間から餌を与えるなど、江戸期から引き続き餌やりを実施していた。シカが鹿園から解放されてわずか1年後、すなわちシカの頭数が激減したといわれて間もない頃に訪れた旅行者でさえも、餌を介してシカと直接ふれあった経験を記述している。シカに与えていた餌は、“cakes”、“biscuits”、“little balls”、“nuts”など多種多様に販売されていた。“cakes”については、小麦粉や米ぬかから出来た焼き菓子という見方をすれば鹿せんべいと解釈できる。“little balls”のように、団子状の餌が売られていたが、江戸期の道中日記で確認されたおからの団子の可能性がある。旅行者向けに売られていたシカの餌は鹿せんべい1種類だけではなく木の実、団子状の餌など種類が豊富であった。

シカの餌は、春日大社の参道を中心に露店がいくつも並んで購入することができた。明治期における奈良のシカと旅行者との接触が行われていたのは、春日大社参道を中心としたエリアであり、その範囲は現在よりも限定されていたことが推測される。

餌の売り手は“musumes”(娘たち)から“old women”まで女性ばかりで、明治期におけるシカの餌の販売は、主に女性が担っていたことが明らかになった。

餌やりを体験した外国人旅行者も明治前期のころから確認でき、明治期の早い段階から、外国人旅行者とシカとの間に餌やりを介してふれあう関係性が構築されていたといえる。明治期においては、地域住民とシカの関係は江戸期から大きく変化したが、旅行者とシカとの関係は江戸から明治にかけての継続性が際立った。

(2) 近代の奈良の案内記類における奈良のシカ

近世から近代、第二次大戦前までの奈良に関する案内記類を概観した。近世は東大寺の復興事業にあわせて17世紀末から名所記が様々発刊されたが、その後19世紀には絵図屋庄八による案内記類の改版がみられるのみで新たな案内記類は発刊されない時期を迎えた。

明治期以降、第二次大戦前までの間に発行された奈良に関する案内記類については、発刊の数と発刊者から大きく3つの時期に区分することができる。第1期は、奈良や近畿を対象とした案内記類と、初期の鉄道旅行案内が多くみられる明治20～30年代。第2期は1909(明治42)年から1925(大正14)年までの鉄道院・鉄道省による案内記類が多くみられる時期。第3期は、1928(昭和3)年以降のジャパン・ツーリスト・ビューローが発刊する案内記類が多くみられる時期である。

案内記類にみるシカに関する記述について、「神鹿」とする表現は、各時期を通じ、多くの案内記類で見られる。「春日野の鹿」という南都八景の景物としての記述はほとんどみられず、近世の案内記類での和歌に詠まれた名所としての「春日野」の紹介は、明治期以降はほとんどなくなっている。鹿苑、神鹿飼養場についての記述の数は多くはないが、第1期から第3期まで広くみられ、ラッパによって飼養場所に集める状況が記述されているものもある。神鹿保護会に関する記述は第2期以降に多く見られるが、これは、シカの保護管理団体の役割の説明というより、鹿寄せや角伐りを実施する団体としての紹介が多くなったためである。

第2期の1914(大正3)年の奈良県による『大和名所案内』、鉄道院による『An Official Guide to Eastern Asia Vol.2』以降、シカの餌やりの紹介が多く見られるようになり、また、神鹿保護会の実施する賓客向けの鹿寄せ、角伐り行事が紹介される事例が増加している。餌やりや行事を中心としてシカと人の関係を観光対象として紹介することは、この大正初期の時期に整理されたとみられる。

(3) 宮島での近世以降のシカと人との関係

近世以降第二次世界大戦までの案内記類、写真帖類、旅行記、新聞記事を収集し、宮島でのシカと人との関係をみた。

1715(正徳5)年に選定されたという厳島八景では、「谷ヶ原麋鹿」として山麓のシカの群れがあげられ、また、近世の厳島図会では市街地と山麓部に広くシカが描かれていた。宮島のシカは神社との結びつきが特に強いものとして位置づけられてはいない。近世の紀行文でもシカが神社と結びついて記述されることはなく、シカは神社の信仰の一部ではなく生活と一体の存在として描かれていた。近世には角切は行われていたが、住民の危害防止を目的としており、来訪者が会おう観光対象としてシカを捉えてはいなかった。

明治期以降、案内記類では積極的にシカを紹介する記述はないが、写真帖類や外国人の旅行記では、神社にいる人に馴れたシカが厳島の代表的景物として取り上げられている。明治期以降、シカは神社と一体として描かれるようになる。外国人からは餌やりを通じたシカと人との関係性が着目されていた。1906(明治39)年に長岡安平が餌を与えシカを集める方法に着目し、それもあつたためか、その後賓客への鹿寄せが頻繁に行われる。一方、シカの数の減少については新聞記事で頻繁に触れられ、保護の必要性についてたびたび取り上げられるが、保護に関する組織の設立は実現していない。神社周辺において、餌やりの管理や人身被害防止といったシカと人が同所に共存するための持続的な保護管理体制はとられなかった。

第二次世界大戦後はシカ個体数の激減から、町が飼養場を設け餌やりを行うが、野生状態のシカと人との関係の観光対象化ではなかった。市街地でのシカの個体数が増加し、1970年代後半にシカ問題が生じた後に協議会が設けられる。これは、シカの餌を販売する観光関係者とシカによる被害を受ける者との対立構造を積極的に調整し、シカと人の同所での共存状態を維持し、観光利用を進める体制をとる機会であった。しかし、同所に共存する判断はされず、最終的に餌を与えない方針となる。

奈良では、シカの保護組織として1891(明治24)年に神鹿保護会が設立されるが、背景としては、その前年に神鹿殺傷禁止区域が春日大社境内と奈良公園に限られ、禁止区域から出て捕獲されるシカの保護を図ることがあった。春日神社の宮司が会長となり、奈良町長も含む有志によって組織され、役員は神職、公吏、農会などの利害関係者が担った。会員は各町総代らの加入を前提とし、給餌などによる保護とともにシカによる被害の協議と対策なども行われていた。奈良のシカは、周辺の農業者にとっては加害獣であり、シカを保護し、同時に観光利用する者と周辺住民は利害が対立する関係で、それを調整する役割を神鹿保護会が担っていた。

宮島と奈良でのシカと人との関係性の違いは、奈良では神聖性をベースにシカと人との関係が構築されたが、宮島ではそうでないこと、宮島ではシカによる農業被害が生じなかったこと、山と市街地が隣接し、シカと人が接する場合はほぼ市街地内となり、日常的に接する環境であること、これらの前提条件の違いがある。これらの違いを背景として、市街地でのシカへの対応が異なっていた。宮島ではシカを保護する宗教的理由はなく、一方でシカによる被害を受ける農林業も行われていなかった。シカは市街地に現れるが、町民はその存在に寛容で、鹿桶などでの餌やりが自然発生的、継続的に行われ、来訪者による餌やりも行われてきた。しかし、1970年代の住民による被害の訴えとともに餌やりを行わない方針となる。宮島にとってのシカは、被害に対応しながら餌を与え続け、市街地での共存を図るべき対象ではなく、組織的に餌やりや個体群の管理を行い野生生物観光を成立させる対象にならなかった。

(4) 金華山での近世以降のシカと人との関係

宮島、奈良とともにシカと人との近接関係が古くからみられる金華山は、島の面積は宮島のほぼ3分の1で神社関係者以外に島内には居住していない。

近世の金華山でのシカと人との関係は、紀行文と絵図類から、1700年代の後半には、人が餌を与え、人に馴れる関係が船着場から大金寺境内までの間で成立していたことが確認された。明治

大正期，第二次大戦終結前までは多くの紀行文から，北参道の船着場と亀島の船着場（現棧橋付近）から神社境内にいたる間でシカと人との餌を介した近接関係が継続していたことが確認された。紀行文からは，金華山でのシカと人との近接関係はおおむね好意的に受け止められており，そのことも近接関係が継続した背景と言えるだろう。

シカと人との近接関係を観光対象として利用していたかについては，近世の絵図類では，シカとの近接関係を強調して描いているものはほぼない。明治大正期には，絵図類の袋にシカが描かれることで金華山でのシカの代表性を強調する意識はみられるが，餌の販売は対岸の山鳥で煎餅が売られていた記録があるだけで，石巻，塩釜からの直行便の場合には入手できなかったであろう。島内の船着場で餌を買った記録は昭和に入ってからのものであり，1925（大正 14）年の棧橋改修と船着場の一元化以降，島内での営業が進められ，観光対象としての利用が進んだとみられるが，案内記類では餌やりについてふれておらず，シカと人の近接関係を積極的に観光利用する意図は感じられない。

金華山でのシカと人との関係では，国有林の被害が特徴的である。藩政時代に金華山大金寺には，仙台藩から全島が寺領として与えられていた。明治期になり，大金寺は廃寺とし黄金山神社とし，寺領はわずかな境内地を残して官有地として上地され，島の 95.8%を国有林が占めている。国有林は高密度に棲息するシカによる造林木の被害対応を早くから行わざるを得ず，造林地の周囲を防鹿柵で囲い，神社周辺に木柵を設けてその中へのシカの追い込みを行うなど，シカと国有林の分離を試みるが造林木の被害はなくなる。港から神社の間でシカと人とが近接関係を構築している一方で，大正期からシカの捕獲，譲渡が繰り返し行われている。しかし，大量に捕獲して大島に譲渡する計画は，神社などの反対で実施されていない。第二次世界大戦後，昭和 25～30 年代にシカは多数捕獲，譲渡される。この状況となってシカを観光の対象とみる黄金山神社や石巻観光協会とシカを排除しようとする国有林の方向性が対立する。神社周辺のシカは餌づけして観光利用の対象とする一方，それ以外のエリアでは毎年数十頭単位で捕獲し，全国に譲渡された。1960（昭和 35）年には大量捕獲計画をめぐって関係者が対立し，捕獲が行われない事態となった。その後シカの大量捕獲は行われなくなり，第二次大戦前のような餌を介したシカと人の関係が見られるようになる。1963（昭和 38）年秋には角切りが奈良を参考にして黄金山神社の行事として開始され，1960 年代にシカの観光利用の形はできあがった。

（5）3 地域のシカと人との関係

奈良では，近世までのシカと人とのつかず離れずの共存関係から，明治初期にシカの排除，管理が行われ，シカと人との関係を変化させる動きが見られた。シカによる農業被害がある中で，神鹿保護会が設立され，シカの管理と被害対策を行うことで，シカの排除への方向転換とはならなかった。このようなシカ管理をめぐる変化はあったが，近世までに成立していたシカと人の近接関係を観光対象とする状況は，明治初期のシカの排除期にも継続し，来訪者はシカとの近接関係に興じ，餌の販売者も多く見られ，近世の形が継続していた。大正期には餌やり，鹿寄せ，角伐りが案内記類に広く紹介されることとなり，神鹿保護会を中心としたシカの管理，観光資源化の形ができあがっていった。

宮島でも明治期以降，神社周辺のシカと人との近接関係が外国人に評価される，鹿寄せを行うなど，これを積極的に観光対象とする機会はあった。しかし，餌やりの管理や被害管理を行い観光利用を進める主体が成立することはなく，第二次世界大戦を迎える。一時期，市街地に現れるシカの数はほぼなくなるが，その後増加する。宮島ではシカによる農業被害はなかったが，シカの生息地と人の居住地が近接しており，居住空間でシカとの共存を図ることは，昭和 50 年代以降困難となった。シカと人との近接関係を持続的な野生生物観光として成立させる背景として，シカと人とが同じ空間を共有し近接関係を維持すべきという地域の意志が根底に必要で，そのために餌やりの管理，人身被害対策などの対応が必要であり，対策を行う主体が成立する。奈良では，その意志はシカを神使として崇める宗教的背景から始まり，神社が主体となって対応を行ってきたが，宮島においては同様の背景は存在しなかった。観光資源として意識しつつも，積極的に管理し，利用する主体が生まれることはなかった。

金華山の場合，人の居住空間はなく，奈良や宮島とは状況が違っている。しかし，明治期以降の国有林にとってはシカは同じ空間を共有し得る存在ではなく，排除が行われる。明治期にもシカと人との近接関係を観光資源として意識していたが，そのために積極的な管理が行われたわけではない。第二次大戦前後に，林業被害防止の観点で大量捕獲が計画され，観光対象の喪失の危機に直面し，神社，観光協会が捕獲に反対し，昭和 30 年代からはその管理に一部取り組むこととなる。大量捕獲がなくなった後の状況は，観光資源として継続的な管理を行う必要性とそのための体制を見いだせない状態と整理される。

近世から継続してシカと人との関係を調整せざるを得ず，結果として観光資源としての利用の形が作られてきた奈良は，極めて特殊な状況で野生動物と人との近接関係を対象とした野生生物観光が成立したものと言える。奈良の場合の神鹿としての長期間の位置づけなど，その場所で野生動物と人が共存すべき強固な背景がない場合，野生動物と人との近接関係を持続的に観光資源として利用することは容易ではないと言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 水谷知生・平侑子 | 4. 巻 32(1) |
| 2. 論文標題 近世近代の奈良に関する案内記類にみる鹿 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 奈良県立大学研究季報 | 6. 最初と最後の頁 41 - 76 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |
| 1. 著者名 平侑子・水谷知生 | 4. 巻 62 |
| 2. 論文標題 明治期における旅行者と奈良のシカの関係 - 外国人旅行記の分析から | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 水谷 知生、平 侑子 | 4. 巻 35 |
| 2. 論文標題 近世以降の宮島のシカと人との関係 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 観光研究 | 6. 最初と最後の頁 35 ~ 52 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18979/jitr.35.1_35 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |
| 1. 著者名 水谷 知生、平 侑子 | 4. 巻 34(2) |
| 2. 論文標題 金華山におけるシカと人との関係 : 近世から近代 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 奈良県立大学研究季報 | 6. 最初と最後の頁 1-33 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------------------|--|--|----|
| 研究 分 担 者 | 平 侑子 (TAIRA Yuko) (00866882) | せとうち観光専門職短期大学・観光振興学科・講師 (46206) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|